

木馬は廻る

江戸川乱歩

青空文庫

「ここはお国を何百里、離れて遠き満洲の……」

ガラガラ、ゴットン、ガラガラ、ゴットン、廻転木馬は廻るのだ。

今年五十幾歳の格二郎は、好きからなつたラツパ吹きで、

昔はそれでも、郷里の町の活動館の花形音楽師だったのが、やが

てはやり出した管絃楽というものに、けおされて、「ここはお国」

や「風と波と」では、一向雇い手がなく、遂には披露目やの、

徒歩楽隊となり下つて、十幾年の長の年月を荒い浮世の波風に

洗われながら、日にち毎日、道行く人の嘲笑の的となつて、

でも、好きなラツパが離されず、仮令離そうと思つたところで、

外ほかにたつきの道とはなく、一つは好きの道、一つは仕しよう様事ことなしの、楽隊暮しを続けているのだった。

それが、去年の末、披露目やから差向けられて、この木馬館へやって来たのが縁となり、今では常じょう備やといの形で、ガラガラ、ゴットン、ガラガラ、ゴットン、廻る木馬の真中の、一段高い台の上で、台には紅白の幔まん幕まくを張り廻めぐらし、彼等の頭の上からは、四方に万国旗が延びている、そのけばけばしい装飾台の上で、金モールの制服に、赤ラシャの楽隊帽、朝から晩まで、五分毎ごふんごとに、監督さんの合図の笛がピリピリと鳴り響く毎に、「ここはお国を何百里、離れて遠き満洲の……」と、彼の自慢のラツパをば、声はり上げて吹き鳴らすのだ。

世の中には、妙な商売もあつたものだな。一年三百六十五日、
 手垢てあかで光つた十三匹の木馬と、クツシヨンの利きかなくなつた五台
 の自動車と、三台の三輪車と、背広服の監督さんと、二人の女切き
 符つづ切りと、それが、廻り舞台の様な板の台の上でうまずたゆまず
 廻つてゐる。すると、嬢じよつちゃんや坊ちゃんが、お父さんやお母
 さんの手を引っぱつて、大人は自動車、子供は木馬、赤ちゃん
 三輪車そして、五分間のピクニックをば、何とまあ楽し相そに乗り
 廻まわしていることか。藪やぶ入りの小僧こぞうさん、学校帰りの腕わんぱく白、中に
 は色気盛りの若い衆までが、「ここはお国を何百里」と、喜び勇ん
 で、お馬の背中で躍おどるのだ。

すると、それを見ているラツパ吹きも、太鼓叩たいこたたきも、よくも

まあ、あんなぶつちようづら仏頂面がしていられたものだど、よそ目には滑こ稽つげいにさえ見えているのだけれど、彼等としては、そうして思い切り頬ほおをふくらししてラツパを吹きながら、撥ぼちを上げて太鼓を叩きながら、いつの間にやら、お客様と一緒になつて、木馬の首を振る通りに楽隊を合せ、無我夢中で、メリイ、メリイ、ゴー、ラウンドと、彼等の心も廻るのだ。廻れ廻れ、時計の針の様に、絶えまなく。お前が廻っている間は、貧乏のことも、古い女房のことも、鼻たれ小僧の泣き声も、南京米のお弁当のことも、梅干一つのお菜さいのことも、一切がっさい忘れている。この世は楽しい木馬の世界だ。そうして今日も暮れるのだ。明日あすも、あさつても暮れるのだ。

毎朝六時がうつと、長屋の共同水道で顔を洗って、ポンポンと、よく響く拍手かしわでで、今日様を礼拝して、今年十二歳の、学校行きの姉娘が、まだ台所でごてごてしている時分に、格二郎は、古女房の作つてくれた弁当箱をさげて、いそいそと木馬館へ出勤する。姉娘がお小遣こづかをねだったり、癩かんも持ちの六歳の弟息子むすこが泣きわめいたり、何ということだ、彼にはその下にまだ三歳の小せがれさえあつて、それが古女房の背中で鼻をならしたり、そこへ持つて来て、当の古女房までが、頼母子講の月掛けが払えないといつては、ヒステリイを起したり、そういうもので充みたされた、裏長屋の九く尺しゃくにけん二間をのがれて、木馬館の別天地へ出勤することは、彼にはどんなにか楽しいものであつたのだ。そして、その上に、あの青

いペンキ塗りの、バラック建ての木馬館には、「ここはお国を何百里」と日ねもす廻る木馬の外ほかに、吹きなれたラツパの外ほかに、もう一つ、彼なぐさを慰めるものが、待っていていさえたのである。

木馬館では、入口に切符売場がなくて、お客様は、勝手に木馬に乗ればよいのだ。そして半分程も木馬や自動車がふさがつて了しまうと、監督さんが笛を吹く、ドンガラガツガと木馬が廻る、すると二人の青い布の洋服かぼんみたいなものを着た女達が、肩から車掌まわの様な鞆かぼんをさげて、お客様の間まわを廻り歩き、お金と引換えに切符を切つて渡すのだ。その女車しゃしやう掌まわの一方は、もう三十を大分だいぶん過ぎた、彼の仲間の太鼓叩きの女房で、おさんどんが洋服を着た格好なのだが、もう一方のは十八歳の小娘で、無論木馬館へ雇われる

程の娘だから、とてもカフエの女給の様に美しくはないけれど、でも女の十八と云えば、やっぱり、どことなく人を惹きつける所があるものだ。青い木綿もめんの洋服が、しつくり身について、その小皺こじわの一つ一つにさえ豊かな肉体ゆたかのうねりが、艶なまめかしく現れているのだし、青春の肌の薫りかおが、木綿を通してムツと男の鼻をくすぐるのだし、そして、きりようはと云えば、美しくはないけれど、どことなくいとしげで、時々は、大人の客が切符を買いながら、からかつて見ることもあり、そんな場合には、娘の方でも、ガクンガクンと首を振る、木馬のたてがみに手をかけて、いくら嬉うれし相そうにからかわれてもいたのである。名はお冬ふゆといって、それが格二郎の、日毎の出勤を楽しくさせた所の、実を云えば、最も主

要な原因であつたのだ。

年齢としがひどく違つてゐる上に、彼の方にはチャンとした女房もあり、三人の子供まで出来てゐる、それを思えば、「色恋」の沙汰たは余りに恥しく、事実また、その様な感情からではなかつたのかも知れないけれど、格二郎は、毎朝、煩わずらわしい家庭をのがれて、木馬館に出勤して、お冬の顔を一目見ると、妙に気持がはればれしくなり、口を利き合えば、青年の様に胸が躍つて、年にも似合わず、臆おくびよう病びょうになつて、それ故ゆゑに一層嬉しく、若もし彼女が欠勤でもすれば、どんなに意気込んでラツパを吹いても、何かこう気が抜けた様で、あの賑にぎやかな木馬館が、妙にうそ寒く物淋ものさびしく思われるのであつた。

どちらかと云えば、みすぼらしい、貧乏娘のお冬を、彼がそんな風に思う様になつたのは、一つは己おのれの年かえりを顧みて、そのみすぼらしい所が、却つて、気安く、ふさわしく感じられもしたのであろうが、又一つには、偶然にも、彼とお冬とが同じ方角に家を持っていて、館かんがはねて帰る時には、いつも道連れになり、口を利き合う機会が多く、お冬の方でも、なつて来れば、彼の方でも、そんな小娘と仲をよくすることを、そう不自然に感じなくとも済むといふ訳わけであつた。

「じゃあ、またあしたね」

そして、ある四つ辻で別れる時には、お冬は極きまつた様に、少し首をかしげて、多少甘つたるい口調で、この様な挨拶あいさつをしたの

である。

「ああ、あしたね」

すると格二郎も、一寸^{ちつと}子供になつて、あばよ、しばよ、という様な訳で、弁当箱をガチャガチャ云わせて、手をふりながら挨拶するのだ。そして、お冬のうしろ姿を、それが決して美しい訳ではないのだが、むしろ余りにみすばらしくさえあるのだが、眺め眺め、^{かす}幽かに甘い気持ちにもなるのであつた。

お冬の家の貧乏も、彼の家のと、大差のないことは、彼女が館から帰る時に、例の青木綿の洋服をぬいで、着換えをする着物からでも、充分に想像することが出来るのだし、又彼と道づれになつて、露店の前などを通る時、彼女が目を光らせて、さも欲し相

に覗のぞいている装身具の類を見ても、「あれ、いいわねえ」などと、
往來ちようかの町家の娘達の身なりを羨望せんぼうする言葉を聞いても、可かわい
哀相そうに彼女のお里は、すぐに知れて了うのであった。

だから、格二郎にとって、彼女の歡心を買うことは、彼の軽い
財布を以もつてしても、ある程度まではさして難しい訳でもないのだ。
一本の花かんざし、一杯のおしるこ、そんなものにも、彼女は
充分、彼の為ために可憐な笑顔を見せて呉くれるのであった。

「これ、駄目だめでしょ」彼女はある時、彼女の肩にかかっている流
行おくれのシヨールを、指の先でもてあそびながら云ったもので
ある。だから、無論それはもう寒くなり始めた頃なのだが「おと
としのですもの、みつともないわね。あたしあんなのを買うんだ

わ。ね、あれいいでしょ。あれが今年のはやりなのよ」彼女はそう云つて、ある洋品店の、ショーウィンドウの中の立派なのではなくて、軒のきの下に下つている、値の安い方を指ゆびさしながら、「ああ、早く月給日が来ないかな」とため息をついたものである。

成る程、これが今年の流行だな。格二郎は始めてそれに気がついて、お冬の身にしては、さぞ欲しいことであろう。若し安いものなら財布をはたいて買ってやってもいい、そうすれば彼女はまあどんな顔をして喜ぶだろう。と軒下へ近づいて、正札を見たのだが、金七円何十銭というのに、逆とても彼の手には合あわないことを悟ると、同時に、彼自身の十二歳の娘のことなども思い出されて、いまさ今更いまさらながら、この世が淋しくなるのであった。

その頃から、彼女は、シヨールのことを口にせぬ日がない程に、それを彼女自身のものにするのを、つまり月給を貰う日を待ち兼ねていたものだ。ところが、それにも拘らず、さて月給日が来て二十幾円かの袋を手にして、帰り途で買うのかと思つていると、そうではなくて、彼女の収入は、一度全部母親に手渡さなければならぬらしく、そのまま例の四辻で、彼と別れたのだが、それから、今日は新しいシヨールをして来るか、明日は、かけて来るかと、格二郎にしても、我事の様^うに待つていたのだけれど、一向その様子がなく、やがて半月程にもなるのに、妙なことには、彼女はその後少しもシヨールのことを口にしなくなり、あきらめ果てたかの様に、例の流行おくれの品を肩にかけて、でも、しよ

つちゆう、つつましやかな笑顔を忘れないで、木馬館への通勤を
怠おこたらぬのであつた。

その可憐な様子を見ると、格二郎は、彼自身の貧乏については、
嘗かつて抱いたこともない、ある憤いきどおりの如ごときものを感じぬ訳には行
かなかつた。僅わずか七円何十銭のおあしが、そうかと云つて、彼に
もままにならぬことを思うと、一層むしやくしやしないではいら
れなかつた。

「やけに、鳴らすね」

彼の隣に席をしめた、若い太鼓叩きが、ニヤニヤしながら彼の
顔を見た程も、彼は、滅めちやくちや茶苦茶にラツパを吹いて見た。「どうに
でもなれ」というやけくそな気持ちだつた。いつもは、クラリネ

ツトに合せて、それが節ふしを変えるまでは、同じ唱歌を吹いているのだが、その規則を破つて、彼のラツパの方からドシドシ節を変えて行つた。

「金比羅舟々こんびらふねふね、……おいてに帆ほかけて、しゅらしゅしゅら」

と彼は首をふりふり、吹き立てた。

「奴さんやつこ、どうかしてるぜ」

外の三人の楽隊達が、思わず目を見合せて、この老ラツパ手の、狂きやう燥そうを、いぶかしがった程である。

それは、ただ一枚のシヨールの問題には止とどまらなかつた。日頃のあらゆる憤懣ふんまんが、ヒステリーの女房のこと、やくざな子供達のこと、貧乏のこと、老後の不安のこと、も早はや帰らぬ青春のこ

と、それらが、金比羅舟々の節廻しを以て、やけにラツパを鳴らすのであつた。

そして、その晩も亦、公園をさまよう若者達が「木馬館のラツパが、馬鹿によく響くではないか。あのラツパ吹き奴め、きつと嬉うれしいことでもあるんだよ」と、笑い交す程も、それ故に、格二郎は、彼とお冬の歎なげきをこめて、いやいや、そればかりではないのだ、この世のありとある、歎なげきの数々を一管のラツパに託たくして、公園の隅すみから隅まで響けとばかり、吹き鳴らしていたのである。

無神経の木馬共は、相変らず時計の針の様に、格二郎達を心棒にして、絶え間もなく廻っていた。それに乗るお客達も、それを取まく見物達も、彼等も亦、あの胸の底には、数々の苦勞を秘め

ているのであろうか、でも、上辺はさも楽し相に、木馬と一緒に首をふり、楽隊の調子に合わせて足を踏み、「風と波とに送られて……」と、しばし浮世の波風を、忘れ果てた様である。

だが、その晩は、この何の変化もない、子供と酔っぱらいのお伽の国に、というよりは、老ラツパ手格二郎の心に、少しばかりの風波を、齎すものがあつたのである。

あれは、公園雑沓の最高潮に達する、夜の八時から九時の間であつたかしら、その頃は木馬を取りまく見物も、大げさに云えば黒山の様で、そんな時に限つて、生酔いの職人などが、木馬の上で妙な格好をして見せて、見物の間に、なだれの様な笑い声がるのだが、そのどよめきをかき分けて、決して生酔いではない、

一人の若者が、丁度止った木馬台の上へヒョイと飛びのつたものである。

仮令、その若者の顔が少しばかり青ざめていようと、そぶりがそわそわしていようと、雑沓の中で、誰気づく者もなかったが、ただ一人、裝飾台の上の格二郎丈けは、若者の乗った木馬が丁度彼の目の前にあつたのと、乗るがいなや、待兼ねた様に、お冬がそこへ駆けつけて、切符を切つたので、つまり半ばなかねたみ心から、若者の一挙一動を、ラツパを吹きながら正面を切つた、その眼界の及ぶ限り、謂いわば見張つていたのである。どうした訳か、切符を切つて、もう用事は済んだ筈はずなのに、お冬は若者の側そばから立去らず、そのすぐ前の自動車の凭もたれに手をかけて、思わせぶり

に身体からだをくねらせて、じつとしていているのが、彼にしては、一層気に懸かりもしたのであろうか。

が、その彼の見張りが、決して無駄でなかったことには、やがて木馬が二ふた廻まわりもしない間に、木馬の上で、妙な格好で片方の手を懐中に入れていた若者が、その手をスルスルと抜き出して、目は何食わぬ顔で外そとの方を見ながら、前に立っているお冬の洋服の、お尻のポケットへ、何か白いものを、それが格二郎には、確かに封筒だと思われたのだが、手早くおし込んで、元の姿勢に帰ると、ホツと安心のため息を洩した様に見えたのだ。

「附つけ文ぶみかな」

ハツと息を呑んで、ラツパを休んで、格二郎の目は、お冬のお

尻へ、そのポケットから封筒らしいものの端が、糸の様に見えるはし
ているのだが、それに釘づけにされた形であつた。若し彼が、以
前の様に冷静であつたなら、その若者の、顔は綺麗だが、いやに
落ちつきのない目の光りだとか、異様にそわそわした様子だとか、
それから又、見物の群衆に混つて、若者の方を意味ありげに睨ん
でいる顔なじみの角袖の姿などに、気づいたでもあろうけれど、
彼の心は、もつと外の物で充たされていたものだから、それどこ
ろではなく、ただもうねたましさと云い知れぬ淋しさで、胸が一
杯なのだ。だから若者のつもりでは、角袖の眼をくらまそうとし
て、さも平気らしく、そばのお冬に声をかけて見たり、はては、
からかつたりしているのが、格二郎には一層腹立たしくて、悲し

くて、それに又、あのお冬奴め、いい気になって、いくらか嬉しそ
うにさえして、からかわれている様子はない。ああ、俺おれは、どこ
に取柄とりえがあつてあんな恥知らずの、貧乏娘と仲よしになつたのだ
ろう。馬鹿奴、馬鹿奴、お前は、あのすべた奴に、若し出来れば、
七円何十銭のシヨールを買つてやろうとさえしたではないか。え
え、どいつもこいつも、くたばつてしまえ。

「赤い夕日に照らされて、友は野末のすえの石の下、」
そして、彼のラツパは益々ますます威勢いせいよく、益々快活に鳴り渡るの
である。

さて、暫しばらくして、ふと見ると、もう若者はどこへ行つたか、影
もなく、お冬は、外の客の側に立つて、何気なく、彼女の勤めの

切符切りにいそしんでいる。そして、そのお尻のポケットには、やっぱり糸の様な封筒の端が見えているのだ。彼女は附文されたことなど少しも知らないでいるらしい。それを見ると、格二郎は又しても、未練がましく、そうなると、やっぱり無邪気に見える彼女の様子がいとしくて、あの綺麗な若者と競争をして、打勝つ自信などは毛頭ないのだけれど、出来ることなら、せめて一日でも二日でも、彼女との間あいだから柄を、今まで通り混り気のないものにして置きたいと思うのである。

若しお冬が附文を読んだなら、そこには、どうせ齒の浮く様な殺し文句が並べてあるのだろうが、世間知らずの彼女にしては、恐らく生れて始めての恋文でもあろうし、それに相手があの若者

であつて見れば、（その時分ほ外かに若い男のお客ななどはなく、殆どほとん子供と女ばかりだったので、附文の主は立たち所どころに分る筈だ）どんなにか胸躍らせ、顔をほてらせて、甘い気持になることである。それから、定めし物思い勝ちになつて、彼とも以前の様には口を利いても呉れなからう。ああ、そうだ、一層いっそのこと、折を見て、彼女がああの附文を読まない先に、そつとポケットから引抜いて、破り捨てて了しおうかしら。無論、その様な姑息こそくな手段で、若い男女の間を裂き得えようとも思わぬけれど、でもたった今宵こよい一よきでも、これを名残なごりに元のままの清い彼女と言葉が交して置きたかつた。

それからやがて十時頃でもあつたらうか。活動館がひけたかし

て、一しきり館の前の人通りが賑やかになつたあとは、一時にひつそりとして了つて、見物達も、公園生え抜きのチンピラ共の外は、大抵たいてい歸つて了い、お客様も二三人来たかと思うと、あとが途絶とだえる様になつた。そうになると、館員達は歸りを急いで、中には、そつと板囲いの中の洗面所へ、歸支度かえりじたくの手を洗いに入つたりするのである。格二郎も、お客の隙を見て、楽隊台を降りて、別に手を洗う積つもりはなかつたけれど、お冬の姿が見えぬので、若しや洗面所ではないかと、その板囲いの中へ入つて見た。すると、偶然にも、丁度お冬が洗面台に向うむきになつて、一生懸命顔を洗っている、そのムツクリふくらんだお尻の所に、さい前ぜんの附文が、半分ばかりもはみ出して、今にも落ち相に見えるのだ。格二

郎は、最初からその気で来たのではなかったけれど、それを見るとふと抜取る心になって、

「お冬坊、手廻しがいいね」

と云いながら、何気なく彼女の背後うしろに近寄り、手早く封筒を引抜くと、自分のポケットへ落とし込んだ。

「アラ、びつくりしたわ。アア、おじさんなの、あたしや又、誰かと思った」

すると彼女は、何か彼がいたずらでもしたのではないかと気を廻して、お尻を撫なで廻しながら、ぬれた顔をふり向けるのであった。

「まあ、たんと、おめかしをするがいい」

彼はそう云い捨てて、板囲いを出ると、その隣の機械場の隅に隠れて、抜取った封筒を開いて見た。と、今それをポケットから出す時に、ふと気がついたのだが、手紙にしては何だか少し重味が違う様に思われるのだ。で、急いで封筒の表を見たが、宛名は、妙なことには、お冬ではなくて、四角な文字で、難しい男名前が記しるされ、裏はと見ると、どうしてこれが恋文なものか、活版刷りで、どこかの会社の名前が、所番地、電話番号までも、こまごまと印刷されてあるのだった。そして、中味は、手の切れる様な十円札が、ふるえる指先で勘かんじょう定して見ると、丁度十枚、外でもない、それは何なにびと人かの月給袋なのである。

一瞬間、夢でも見ているか、何か飛んでもない間違いを仕出しでか

した感じで、ハツとうろたえたけれど、よくよく考えて見れば、
一途いちぢずに附文だと思ひ込んだのが彼の誤りで、さっきの若者は、多
分スリでもあったのか、そして、巡査に睨まれて、逃げ場に困
り、暢気相のんきに木馬に乗ってごまかそうとしたのだけれど、まだ不
安なので、スリ取ったこの月給袋を、丁度前にいたお冬のポケッ
トにそつと入れて置いたものに相違ない、ということが分つて来
た。

すると、その次の瞬間には、彼は何か大儲けおおもうをした様な気持
ちになって来るのであった。名前が書いてあるのだから、スラレ
た人は分っているけれど、どうせ当人はあきらめているだろうし、
スリの方にしても、自分の身体の危いことだから、まさか、あれ

は俺のだと云つて、取返しに来ることもなからう。若し来た所で、知らぬと云えば、何の証拠もないことだ。それに本人のお冬は実際少しも知らないのだから、結局うやむやに終つて了うのは知れている。とすると、この金は俺の自由に使つてもいい訳だな。

だが、それでは、今日こんにちさまに済むまいぞ。勝手な云い訳をつけて見た所で、結局は盗ぬすびと人の上前をはねることだ。今日さまは見通しだ。どうしてそのまま済むものか。だが、お前は、そうしてお人好よしにビクビクしていたばかりに、今日きょうが日ひまで、このみじめな有様を続けているのではないか。天あまから授さずかつたこのお金を、むぎむぎ捨てることがあるものか。済む済まぬは第二として、これだけの金があれば、あの可哀相な、いじらしいお冬の為

に、思う存分の買物がしてやれるのだ。いつか見たシヨールウイン
ドウの高い方のシヨールや、あの子の好きな臙脂色えんじいろの半襟はんえりや、
ヘアピンや、それから帯だつて、着物だつて、儉約をすれば一通
りは買い揃えることが出来るのだ。

そうして、お冬の喜ぶ顔を見て、真しんから感謝をされて、一緒に
御飯でもたべたら……ああ、今俺には、ただ決心さえすれば、そ
れがなんなく出来るのだ。ああ、どうしよう、どうしよう。

と、格二郎は、その月給袋を胸のポケット深く納めて、その辺
をうろうろと行ったり来たりするのであった。

「アラ、いやなおじさん。こんな所で何をまごまごしてるのよ」
それが仮令安白粉やすおしろいにもせよ。のびが悪くて顔がまだらに見え

るにもせよ。兎も角、お冬がお化粧をして、洗面所から出て来たのを見ると、そして、彼にしては胸の奥をくすぐられる様なその声を聞くと、ハツと妙な気になって、夢の様に、彼はとんでもないことを口走ったのである。

「オオ、お冬坊、今日は帰りに、あのシヨールを買ってやるぞ。

俺は、ちゃんと、そのお金を用意して来ているのだ。どうだ。驚いたか」

だが、それを云つて了うと、外の誰にも聞えぬ程の小声ではあつたものの、思わずハツとして、口を蓋ふたしたい気持だつた。

「アラ、そうお、どうも有難う」

ところが、可憐なお冬坊は、外の娘だつたら、何とか常談じょうだんぐ

口の一つも利いて、からかい面づらをしようものを、すぐ真まに受けて、真から嬉しそうに、少しはにかんで、小腰をかがめさえたものだ。となると、格二郎も今更ら後へは引かれぬ訳である。

「いいとも、館がはねたら、いつもの店で、お前のすきなのを買ってやるよ」

でも、格二郎は、さも浮うきうき々と、そんなことを受合いながらも、一つには、いい年をした爺じいさんが、こうして、十八の小娘に夢中になつてゐるかと思うと、消えて了たい度い程恥しく、一こと物を云つたあとでは、何とも形容の出来ぬ、胸の悪くなる様な、はかない様な、寂さびしい様な、変な気持ちに襲襲われるのと、もう一つは、その恥しい快樂を、自分の金でもあることか、泥棒のうわ前をは

ねた、不正の金によつて、得ようとしている浅間あさましき、みじめさが、じつとしていられぬ程に心を責め、お冬のいとしい姿の向うには、古女房のヒステリイ面、十二を頭かしらに三人の子供達のおもかげ、そんなものが、頭の中を万字巴まんじともえとかけ巡めぐつて、最早物事もはやを判断する気力もなく、ままよ、なる様になれとばかり、彼は突如として大声に叫び出すのであつた。

「機械場のお父とつつあん、一つ景気よく馬を廻しておくんなさい。俺あ一度こいつに乗つて見たくなつた。お冬坊、手がすいているなら、お前も乗んな、そつちのおばさん、いや失敬失敬、お梅うめさんも、乗んなさい。ヤア、楽隊屋さん。一つラツパ抜きで、やつつけて貰おうかね」

「馬鹿馬鹿しい。お止しよ。それよか、もう早く片づけて帰るところにしようじやないか」

お梅という年増としまの切符切りが、仏頂面をして応じた。

「イヤ、なに、今日はちつとばかり、心嬉しいことがあるんだよ。ヤア、皆さん、あとで一杯ずつおごりますよ。どうです。一つ廻してくれませんか」

「ヒヤヒヤ、よかろう。お父つあん、一廻し廻してやんな。監督さん、合図の笛を願いますぜ」

太鼓叩きが、お調子にのって怒鳴どなった。

「ラッパさん、今日はどうかしているね。だが余り騒がない様に頼みますぜ」

監督さんが苦笑いをした。

で結局、木馬は廻り出したものだ。

「サア、一廻り、それから、今日は俺がおごりだよ。お冬坊も、お梅さんも、監督さんも、木馬に乗った乗った」

酔っぱらいの様になった格二郎の前を、背景の、山や川や海や、木立や、洋館の遠見とおみなぞが、丁度汽車の窓から見る様に、うしろへ、うしろへと走り過ぎた。

「バンザーイ」

たまらなくなつて、格二郎は木馬の上で両手をひろ拡げると、万ばんざ響びいた。ラツパ抜きの変妙な楽隊が、それに和わして鳴り響いた。

「ここはお国を何百里、離れて遠き満洲の……」

そして、

ガラガラ、ゴットン、ガラガラ、ゴットン、廻転木馬は廻るのだ。

青空文庫情報

底本：「江戸川乱歩全集 第3巻 陰獣」光文社文庫、光文社

2005（平成17）年11月20日初版1刷発行

底本の親本：「創作探偵小説集第四巻」春陽堂

1926（大正15）年9月26日発行

初出：「探偵趣味」探偵趣味の会

1926（大正15）年10月号

※底本巻末の平山雄一氏による註釈は省略しました。

※「廻」に対するルビの「めぐ」と「まわ」の混在は、底本通りです。

入力：金城学院大学 電子書籍制作

校正：まつもっし

2018年7月27日作成

2018年9月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたっては、ボランティアの皆さんです。

木馬は廻る

江戸川乱歩

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>